

イベントレポート

第6回政策系大学・大学院研究交流大会

去る二〇一〇年一二月一二日(日)、キャンパスプラザ京都にて開催された、「第六回政策系大学・大学院研究交流大会」京都から発信する都市政策」という政策発表会に、本大学院から二チームが参加し、その内五期生(当時一回生)で構成された「POSTUM(政策提言ゼミ)」チームが日本公共政策学会賞を受賞した。

この政策発表会は、都市の抱える問題・課題を見つけ、それを解決するための「都市政策」を学ぶ大学生・大学院生の研究交流・発表の場として、「公益財団法人大学コンソーシアム京都」が毎年開催している。六回目になる本大会では、口頭発表五四組、パネル発表二〇組、特別企画展示六組、合わせて八〇組が研究の成果を発表し、互いに交流を深めた。

本大学院から出場した二チームが所属するPOSTUMとは、実際の政策が行われる現場や公共的課題を抱える現場へと継続的に赴くことで、実際の課題解決を通じて得られる「現場感覚」を経験することを目的として、四期生により二〇〇九年春に設立された自主活動団体である。

POSTUMから出場した二チームのうち、一組は、代表の光武雄一朗を筆頭に、大橋豊・関根沙織・竹中良企・中谷祐也・則本浩佑・平井隆仁・堀古都子の五期生八名から構成されている。このチームは、「潜在的地域資源を活用する地域振興策」京都市伏見地区に見る観光振興」をテーマとして発表を行った。

五期生チームは昨年五月から活動を始め、準備を重ねてきた。チームの人数が多いこともあり、テーマ設定に至るまでに、何度もメンバー内で議論が行われた。その結果、京都市内で課題の多い地域として京都市伏見区が取り上げられ、その地域活性化について政策提言することとなった。伏見の活性化について、酒造業を中心に据えるか、観光業を中心にするか、についてもメンバー内で意見対立があった。侃々諤々の議論を経て、可能性の大きさから、観光業を主軸として政策提言を行うことになった。そして今回の発表のために、京都市役所、伏見区役

所、及び各関係者へのヒアリング調査やフィールドワークを行った。

京都市伏見区は織豊政権期以降、伏見城下町を中心に商業拠点として繁栄を極めてきた。しかし、近年は、相対的に商業拠点としてのプレゼンスが低下し、地域活力の停滞傾向が見られる。この現状に対し、伏見区、特に旧伏見市地域について、旧伏見市地域が有する観光資源の積極的な情報発信や地域間での連携などを通して、現状では京都駅以北の観光地に流れてしまっている観光客を伏見に呼び込むことで、観光振興による地域活性化を図るべく、五期生チームは政策提言を行った。

大会の本番では、竹中・中谷・平井の三名がプレゼンを担当した。発表の序盤では、竹中・中谷が、伏見区の観光の現状と、不振の原因について述べていった。まず、国土交通省の行政資料をもとに、車で京都を訪れた二八六名の観光客が観光地間を移動した回数は総数で四五〇回であるが、その内伏見の観光地が含まれているものは三回に過ぎない、という調査結果を示した。さらに、公共交通機関を利用した二、〇九六名の観光客が観光地間を移動した回数は総数で三、八〇一回であるが、その内伏見の観光地が含まれているものは八九回に過ぎないことも示した。これらの事実から、多くの観光客は



発表する平井（左）、竹中（中央）、中谷（右）

京都市中心部を周遊するのみであつて、伏見区に立ち寄ることは殆ど無い、という現状を指摘した。

調査年報の分析から、二〇〇九年で最も観光客の訪問の多かった清水寺から半径二キロメートル以内に、観光客数が上位二〇位までに入る観光地が七箇所存在するなど、京都市中心部において狭い範囲に人気のある観光地が集中している状況を提示した。

一方で、伏見区内に観光客数が二〇位までに入る観光地は存在せず、寺田屋、伏見稻荷大社、醍醐寺といった主だった観光地は、それぞれ遠く離れており、京都市中心部と比較して伏見は各観光資源が分散的である、と分析した。この事実に加え、京都市バスの運行状況について、伏見区内を運行している市バスの本数は京都市

内中心部と比較して相当に少ない本数であり、比較的不便な交通環境であることを述べた。

以上より、伏見区は、①京都市中心部と比較して、観光客の周遊に含まれておらず、②伏見区自体非常に面積の広い地区であり、各観光施設が分散していて、③そうであるにも関わらずそれらを効率的に繋ぐ交通環境が整備されていない、という問題点を指摘した。

そして、伏見が観光客の周遊の対象になっていない原因については、京都市を訪れた観光客に対するアンケート調査から、①伏見の各施設自体は知られており、②それらを周遊する観光への潜在的ニーズは高いものの、③それらが具体的にどこに所在しているかは知られておらず、そのことによって全国的知名度を獲得している伏見大社や醍醐寺への単発的な観光にとどまっていることだと言及した。

次に、これらの問題点に対する解決策を、平井がスティーブ・ジョブスを彷彿とさせる熱弁をもって披露した。

伏見区は観光において高い潜在力を秘めながらも、観光施設の魅力の発信力が不足しており、分散している観光資源を活かすようなツアーも組まれていない。そこで、昨今の観光のトレンドが知的探求型に移行してきたことに鑑み、「幕末」や「豊臣秀吉」といった歴史的キーワード

を基にした「観光コース」を整備し、それに沿って分散している各施設を一回りするような交通手段を用意するプランを提示した。同時に、このプランによる経済効果や、バスをどれだけ増便可能か、といった試算も行い、説得力のある政策提言を行った。発表後の質疑応答でも、活発な議論がなされた。

本大学院から出場したPOSTUMのもう一チームは、四期生（当時二回生）の小倉和輝と小畑勇二郎（本誌編集委員）の二名からなるチームであった。このチームは、「京都市未来まちづくり一〇〇人委員会」（以下、一〇〇人委員会）を事例に、『協働』の新形態について取り上げた。

実際の政策現場に継続的に関わり、政策の現場を体感するために、小倉と小畑は、市民協働の先端事例である一〇〇人委員会に、二〇〇九年秋から約一年半の間、ボランティアスタッフとして参加してきた。一〇〇人委員会は幅広い層の市民の参加を得て、従来の行政の縦割りを排し、京都のまちづくり全体に関するテーマを、市民自らの発想により大局的な観点から設定した上で、今後のまちづくりの方向性や具体的な取組方策について議論する市民組織として京都市により設立されたものである。この委員会の事務局の運営はNPO団体が行っている。小倉



発表する小畑（左）、小倉（右）

会へ貢献したいという漠然とした思いが、あれば十分である。この三点である。そして①と②の特徴を併せ持ち、そこに一

と小畑は、この一〇〇人委員会での経験を踏まえ、委員会の実態と有効性を検討し、その意義を明らかにすることを目的とし、また、一年半に渡る活動を形に残す意味も込めて、政策発表会に参加した。発表に際しては、それまで行ってきた参与観察に加え、一〇〇人委員会の運営主体であるNPOや行政ヘヒアリングを行った。彼らは、一〇〇人委員会の特徴を三点挙げる。その特徴とは、①市民が、自らを取り組む課題を選択するところから議論をはじめること、②市民は、選択した課題に対して何らかの「行動」を起こすことを目指していること、③委員会への参加のハードルが低く、何らかの形で地域社

会へ貢献したいという漠然とした思いが、あれば十分である。この三点である。そして①と②の特徴を併せ持ち、そこに一〇〇人を越える市民が参加することにより、一〇〇人委員会の活動が創造性の高いものとなっていると指摘した。

小倉と小畑は、こうした特徴から、一〇〇人委員会の意義を、「市民が公共的課題に立ち向かうための力を養成するOITの機会を、行政が提供したこと」にあると結論づけた。つまり、従来は、公共的課題への対応を職業とする行政機関の職員だけが、OITによって課題解決能力を養う機会を得てきた。しかし、一〇〇人委員会のような機会は、そうしたOITの機会を市民に開放することになり、市民力の成長につながる。小倉と小畑は、この市民力の成長にこそ、一〇〇人委員会の意義を見出したのである。そして、このような機会は、地域に貢献したものの、どのような課題に対してどのようにアプローチしたらよいのかわからない市民にとって有効だと示した。なぜなら、そうした市民にとって、ワークショップ形式の運営であることは、議論の中で自らの興味を見つけやすい。また、委員が行政からの委嘱を受けていることで、何らかの活動を行うことが他者から要請されると同時に、使命感を高めるため、活動の質と持続性を高めることになる。さらに、一〇〇人委員会の各分科会が同じ組織内で「行動」に向けて努力をしていることは、互いの刺激にな

りモチベーションの維持にもつながっている。

発表の最後には、一〇〇人委員会の取組を踏まえて、これからの協働は、特定の市民活動団体との連携に留まらない、より幅広い市民層との協力を目指したオープンな活動となるべきであり、その初期段階では、市民の成長が主眼であって良いという小倉と小畑の見解も述べられた。そして、それによってこそ、地域社会における住民自治の実現につながるのではないかと指摘した。こうした発表に対して、見学していた京都府職員の方などから活発な質疑を受けた。その後、参加者を労うべく懇親会が催された。その席で、優秀発表に対する表彰も行われ、五期生チームに、優れた発表論文に対して贈られる「日本公共政策学会賞」が授与された。

今回の発表を通し、POSTUMで活動したメンバーは、公共的課題の現場に継続的に赴き、そこで発生する大小様々な問題に実際に直面することで、まさに一筋縄ではいかない状況下で、人々は何をどう考え、公共的職務に従事する者は、それにどう応えるべきなのかを実体験に基づいて考える機会を得た。こうした経験が、将来の職業生活において活かされることを期待したい。〓文中敬称略（文責 後藤茂文）